「情熱」を宿して

代田中・1　松井　悠流

人を動かす力。それは、僕がもっているものではない。周りの人の思いを汲み取れず、内気な僕にとって、そんな力をもった人たちは遠く輝く存在だ。そう思っていた。しかし、自分ももっている力だと気づかされた。この本と出会ってから。

日々、僕は辞書を使う。初めて知った言葉、意味を知らなかった言葉。一つ一つを丁寧に追いかける。分厚い辞書からは、辞書を作った人たちの努力がひしひしと伝わってくる。なんという根気だろうか。

新しい辞書「大渡海」は、世間で出回る辞書の一つになろうとしていた。作った人たちの努力の結晶である、辞書の一つに。そんな辞書を完成させるべく、玄武書房の彼らは打ち込む。辞書に収録する言葉を、記載漏れがないように一つずつ確認していく。使いやすさに徹底的にこだわる。「海を渡る舟」を編むために。彼らは辞書に魅入られ、情熱をかけていた。

「なぜ彼らは、『辞書』というものに情熱をかけられるのだろう」この本を読み始めてから、最初に思った僕の疑問。なぜなら、彼らは十五年もの間「辞書」一筋に情熱をかけて打ち込んできていたからだ。もし、自分が彼らの立場にいたとするならば、十五年間打ち込んでいる間に、投げ出してしまっていただろう。もちろん「使いやすい辞書にしたい」という思いはもつだろうが、そのために辞書と本気で向き合おうとは思わないはずだ。だからこそ、この疑問は深まるばかりだった。

しかし、そんな彼らの中の一人、西岡さんには、僕が共感できる点があった。西岡さんは、辞書作りにまともに向き合おうとしていない人だった。なぜなら、辞書作りという仕事に情熱をかける、彼らの思いが理解しがたいものだったからだ。なぜ仕事に情熱をかけられるのか。僕も西岡さんも、仕事とは会社の業績のため、給料をもらい生活するためのものだと思っていた。なぜ周りの彼らがそれほど仕事に情熱を注げるのか、なぜそれほど一つのものに夢中になれるのか、わかっていなかった。僕は、心の拠り所を見つけた気がした。

しかし、そんな西岡さんも、しだいに彼らのように辞書に打ち込むようになっていった。僕は焦りや疎外感を覚えた。自分だけ置いていかれたような感覚を。

そのとき、西岡さんはこう考えていた。

「だれかの情熱に、情熱で答えること。」

はっとした。自分は、そんなことを考えたことがあっただろうか。記憶を辿ると、一つの出来事が思い当たった。

その時僕は、委員会でポスター作りをしていた。これから始まる企画を宣伝するためのポスターを、仲間と作っていた。周りのみんなは、良いポスターにしようと意気込んでいる中、僕は緊張していた。

色を塗る係だった僕は、震える手で枠の中を塗っていった。心に、燃える思いを宿しながら、全力で。

そして、ポスターを掲示する日。完成したポスターが机に置かれていた。全力で作り上げた、一枚のポスター。仲間は、どんな反応をするのだろうか。仲間は口を開いた。

「すごいね。こんなに綺麗にできて。」

さらにもう一人。

「全力を注いでよかった。」

ほっとした。全力でやってよかった。肩の荷が下りることを感じた。そして、全力で取り組む人に、全力で応えられてよかった。情熱に、情熱で応えられてよかった。僕は安堵した。心が晴れわたる

ように。
　情熱には、人を動かす力があるのだろう。誰かがつないでくれたものを、自分がつないでいきたいと思えるような力が。僕は、一枚のポスターを通して、そんな力を実感した。そして、自分ももっている力だと気づくことができた。
　「なぜ彼らは、『辞書』いうものに情熱をかけられるのだろう」。それは、情熱をかけている人の思いに応えるためだ。「辞書」を作り上げようとしている人の思いに、自分の全力の思いで応えるため。僕はこの本と出会い、情熱の原動力の大きさに気づくことができた。「海を渡るにふさわしい舟を編む」この言葉からは、「舟を編む」人々の情熱が伝わってきて、気に入った。この本に会えてよかった。
　辞書というものにすべてをかける、玄武書房の人たち。彼らは、新しい辞書を作り上げるという目標への情熱で、周りの人たちの心を揺るがし「大渡海」を作り上げた。僕にもこの先、合唱コンクール、部活動などで目標が芽生えるだろう。その時僕は、その目標に向かってどれだけの情熱をもてるだろうか。僕は、もてる限りの情熱を心に宿し、目標に向かって全力投球していきたい。情熱で周りの人と思いを一つにして、目標にまっすぐ進んでいきたい。情熱が、人を、目標までの軌跡を、動かしていくのだから。